

**渡邊高亮 『ボランティア精神とは何か』****【研究テーマについて】**

まず、筆者の渡邊さんがこのテーマを選んだ勇気を称えたいと思います。

その理由は二つ。第一は、「ボランティア精神」はきわめて抽象的な概念で、捉えるのが難しいと思われるからです。現在起きている事件や問題を取り上げるのとは違って、明確な形を伴わないものを追究することは、筆者の想像力と感性を必要とします。

第二は、筆者がボランティアに興味がないということを告白し、その前提に立ってボランティア精神を論じようとしているからです。ボランティアについて論じるとき、普通はボランティアを普及推進しようという啓発的な立場から論じるものですし、ボランティアは善きものであるという暗黙の道徳的前提があるので、ボランティアを推進すべきだという議論はそれほど難しくないとされます。しかし、筆者の場合にはボランティア推進論にどうしても共感できない、納得がいかないというところから話を始めざるを得ないので、議論は困難を極めることが容易に想像されます。

したがって、困難であるにもかかわらず敢えてこのテーマを選んだこと自体、じつにたいしたものだと感心しました。

実際に「ボランティア精神」そのものについて解明できたか否かはともかく、筆者が論文で取り上げた問題自体は、決して軽視できないものであり、ボランティアを推進する現代社会への警鐘と受け取ることもできると思います。

もともとボランティア精神は個人の自発性そのものであったはずですし、筆者も紹介しているように宗教的・倫理的な基盤に立脚するものでした。しかし、現代社会では新自由主義改革のなかでボランティアが政策的に奨励され、学校教育では強制的な奉仕活動が導入されて、社会の風潮としてもボランティアをしない人は肩身が狭いかのような息苦しさを感じさせるようになりつつあるのではないのでしょうか。これは個人の自発性を歪めるだけでなく、思想信条の自由に対する柔らかな抑圧にもなりかねません。

ボランティアをする者の立場からはさまざまな発言がある一方で、ボランティアをしない者の立場からの発言はほとんど見受けられません。考えてみればボランティア人口は、増えたとはいえ全体の 3 割しかない言わば少数派であり、人口の 7 割はボランティアをしない人たちです。ボランティアをしない人たちは、単に「参加の機会がない」とか「情報がない」というだけでなく、何らかの言い分があるはずで、筆者はその代弁を試みているとも言えましょう。急いで付け加えれば、筆者は何もボランティアの存在意義を否定しているわけではなく、重要性は十分に認識しながら、ボランティア精神の押し付け・無理強いを排し、各人の持っている「相手の立場を理解」し「助けよう」という自発的な心性に委ねよと主張しているのです。押し付けられれば、たとえどんなに良いものであっても反発する精神が生まれる、それではもはやボランティア精神とは似て非なるものになってしまいます。ボランティアの普及を考える際に、忘れてはならない視点を筆者は示してくれていると思います。

**【研究方法について】**

ボランティア精神という抽象的な概念を探求するにあたって、世界三大宗教であるキリスト教、仏教、イスラームを調べ、そこからボランティア精神に通じる教えを導き出しています。また、倫理学や哲学にも視野を広げて、「善」と「偽善」についての考察を深めました。幅広い分野の文献を読んで考察したことは高く評価できます。論文全体の論理構成では、全体のつながりがもう少し明確になればなお良かったと思いますが、最初の段階に比べればかなり改善されました。

ボランティアを行っていない人は、なぜボランティアをしないのか。ボランティアに興味がない人は、なぜ興味がないのか。普通は、ボランティアをしている人に、なぜ興味を持ったのかを問うことが多いですが、興味がない人の本音を聞きだすことも必要とされているように思います。